

A 国 語

(50分)

答えはすべて **解 答 用 紙** に書き入れること。

【この冊子について】

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子に手をふれてはいけません。
2. この冊子の2～3ページは白紙です。問題は4～16ページです。
3. 解答用紙は、冊子の中央にはさまっています。試験開始の合図後、取り出して解答してください。
4. 試験中に印刷のかすれやよごれ、ページのぬけや乱れ等に気づいた場合は、静かに手を挙げて先生に知らせてください。
5. 試験中、冊子がバラバラにならないように気をつけてください。

【試験中の注意】 以下の内容は、各時間共通です。

1. 試験中は先生の指示にしたがってください。
2. 試験中、机の中には何も入れないこと。荷物はイスの下に置いてください。
3. 先生に申し出ればコート・ジャンパー等の着用を許可します。
4. かぜ等の理由でハンカチやティッシュペーパーの使用を希望するときは、先生の許可を得てから使用してください。
5. 試験中に気持ちが悪くなったり、どうしてもトイレに行きたくなったりした場合は、静かに手を挙げて先生に知らせてください。
6. 試験中、机の上に置けるのは、次のものだけです。これ以外の物品を置いてはいけません。
 - ・黒しんのえん筆またはシャープペンシル
 - ・消しゴム ・コンパス
 - ・直定規 ・三角定規一組（10cm程度の目盛り付き）
 - ・時計 ・メガネ
 筆箱も机の上には置けませんので、カバンの中にしまってください。
7. 終了のチャイムが鳴り始めたら、ただちに筆記用具を置いてください。
8. 答案を回収し終えるまで、手はひざの上に置いてください。

【一】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

今度の遠足は蔵王で、拓也は初めて汽車に乗れるのでうれしかった。けれど、遠足の日が近づくにつれて、心配になってきたことがひとつある。

前々から遠足にはいて行くズックを買ってくれるように頼んでおいたのに、明日が遠足だという今日になっても、まだ買ってもらえなかった。

遠足の前日は朝から雨だった。はずれたといのい間から落ちてくる雨水が、軒下の古だるに当たって、ビチャビチャ音をたてるのを聞きながら、拓也は朝飯を食った。

ゆうべも母親によく頼んでおいたけれど、母親は①「返事ばかりで、買ってやるとも、買ってやらないとも、言わなかった。」

父親は朝飯をすませると、いろいろいっぷくをつけた。拓也はズックのことで、何か言うのではないかと、ときどき目のはしで見るのだが、ゆるゆるとたばこの青いけむりが上がっているだけで、いつもと少しも変わらなかった。ズックと、のどまで出かかったが、みそ汁といっしょに飲みこんで、母親の方をにらんだ。母親はセカセカと後かたづけを始めている。拓也は急いでご飯をかきこんだ。

土間で拓也が長くつをはいていると、そのわきにペチャンコになった貧相なズックがあった。②きのうまで履いていた物なのに、もう何年もどこかでほこりにまみれていた、きたない物に見えた。

母親も土間におりてきて、かけてあったカッパを着た。今日じゆうに町に行つて、買つてきてもらわないことには間に合わないの、拓也は片方のズックを、つまむように持ち上げて、もう一度ねだった。

「かあちゃん、ほれ見でみろ。俺のズック」

母親はゴワゴワのカッパを着て、髪の毛をうるさそうに後ろになでつけた。母親がふり返ったところで、拓也は小指からかかとの方に向かつて、大きく穴のあいているズックを、おおげさに開いて見せた。

「バクバクだ。こんじゃ遠足にはいていかにエ。あしただけ、遠足」

「ん、……」

わかったのかどうか、母親はあやしい返事をして戸を開けた。

「絶対買つてな」

と、もうひとこと言おうとして、拓也も外に出た。

雨はあいかわらず降っていて、その中をカッパをすっぽり着こんだ母親が歩いていた。かさを開いていると、和子の母親の山本先生も家から出て来た。拓也の母親は三度もおじぎをした。山本先生は薄茶のかさをさして、クリーム色のスラックスをはいていた。黒いゴムガッパは、とろとろにぬれながら山の方に曲がって行った。

拓也のすぐわきで、はずれたといからこぼれる水が、古だるに当たって四方に散っていた。そつとかさをさし出して、雨水をうけてみた。そして、ボンボンボンという不規則なかさ当たる水の音を聞きながら、右と左にだんだんわかれていく二人をながめていた。

夕方になると、西の方にある飯豊山の上の空が、少しずつ明るくなってきた。拓也はその空を見てあしたは晴れるだろうと思った。夜になっても、父親も母親も新しいズックのことはなにも言わなかった。

新しいズックは、家のどこにもないようだった。

拓也は腹がへっていたけれど、夕飯を食わなかった。食つてやるもんか、そんな気持ちでだまっていると、

「食いたくなけりや、食わなけりやいい」

と、父親がどなった。

拓也はくやしくなって、ふとんを頭からかぶって、そのまま眠ってしまった。

つぎの日は、遠足だということと、腹がへったのとで、いつもよりだいぶ早く目がさめてしまった。拓也は何回も寝返りをうちながら、腹がへったのをがまんして、ホオジロの鳴くのを聞いていた。

「起きて用意するは」

と、母親が戸の向こうから声をかけた。

「晴れたかア」

ホオジロが鳴くので、晴れているのはわかっているけれど、きいてみた。

「日本晴れだ。早く起きてご飯食べは」

いもの煮^にえている、うまそうな匂^{にお}いがした。

起きてきた拓也を見て、母親が言った。

「これなら、今日一日ぐらい、はけるベエ」

見ると、ズックは洗ってあって、穴のあいた片方のズックが、白い糸でぬってあった。

「もうちよいで乾^{かわ}ぐは」

母親は、ズックの口を火にかざして乾かしていた。

「ケエー、ぬったんかア」

「もうすぐ、米売ったら新しいの買ってやつから」

「うん……」

洗ったあとが黄色くしまになって、きばんでいる線が、拓也にはボロくさくていやだったけれど、しかたないと思つてうけとった。ボロはボロだけど、前のズックよりはよっぽどましだし、なんだかうれしい気がして、母親に何か言いたくなった。土間におろして、そろえながら、

③A 「ちよつとカッコ悪いなア」

と言つて、笑つてみせた。

「なんもカッコ悪いことがあるもんか」

背中の方から聞こえてきた母親の言葉のおわりが、かすかに震^{ふる}えているようだった。拓也は、③B 言わなければよかった、と後悔^{こうかい}した。

学校に集まると、和子はだれよりもしゃれた洋服を着^はうし帽子をかぶり、ズックもピンクの新しい物をはいていた。いつにもまして、はなやいだ雰^{ふん}囲^い気が和子にはあった。

拓也は和子にだけは、ぬってあるズックを知られたくないと思つた。とくに、汽車に乗つて、向かい合つて座席にすわったときなど、二人のズックがおたがいに並んで、ぬってある白い糸が見つかつてしまひそうで、気が気ではなかった。拓也は気づかれないように少しずつ足を交差させ、ぬってある方のズックに片方をのせてかくした。

けれど、初めて乗つた汽車がゴトンと揺^ゆれて、スピードをあげ、トンネルや鉄橋や町の家並みが、つぎつぎに現れる窓の外をながめているうちに、それもいつしか忘れてしまった。

九月は川遊びのできる最後の月だった。十月もやらないことはないが、水が少しずつ冷たくなってくるし、そのころは、山に栗^{くり}が落ちたり、きのこが出てきたりするので、だんだん山の方に行くようになる。

川での遊び場は、大滝^{おおたき}の川原ときまつていて、行くとだれかかれか必ずいた。

川にそつた道路を、川下に十五分ばかり行くと発電所がある。その下がゆつくりとカーブしているのだが、りんご畑を過ぎて、土手を降りると、大きな玉石^{たまし}がごろごろしている川原に出る。川原には水たまりがあつたり、小さな川が別れて、シャラシャラ流れていたりで、いたるところ絶好の遊び場だった。

遠足のつぎの日、拓也が川原の土手に立つて見ると、いたのはめずらしく和子ひとりだった。川原は一昨日^{おととい}の雨で増水して、水たまりの形が少し変わっていた。なかでも川原のまんなかにある大きな水たまりは、まだ本流とつながっていた。そこで和子は、白いスカートのすそをパンツにはさみこんで、ひざまで水に入っていた。増水したつぎの日は、ハヤやナマズが水たまりに流れてきて、そのままそこに巣くつてい

ることがよくあるので、拓也は和子が見つけたなと思つて、土手を一気にかけおりました。

やつぱり水たまりには大きなナマズが一匹^{いっぴき}入っていた。

拓也は水たまりの流れ口から、本流に逃^にげられないように、よもぎを引きぬいてきて、流れ口に山ほどつんだ。その上に石をのせておけば、水はすき間から逃げていくが、ナマズは逃げ出せなくなる。そうしておいて、水の入口^{いりぐち}の方から少しずつ追っていく。

「どー、どどどどど。どー、どどどどどど」

と、口をとがらせながら足で底を踏^ふんでナマズを追いたてた。和子は拓也が作ったインスタントのや^やな^なの前でまちかまえた。

ナマズは一番深いところに沈^{しず}んでいて、なかなか動かなかつた。やつとのっそり動いて浮^ういてきたかと思うと、すぐにくるりと向きを変えて濁^{にご}った底にかくれてしまった。

「早く早く」

と、和子がせかした。

「さわぐな、警戒すんべな」

拓也は見えなくなった底を、やみくもに足でかきまわした。それでもナマズは出てこなかった。

「だめだ。濁り過ぎで、どこさいるかさっぱりわがね。おさまるまで、ちっと中止だ」

拓也は、半ズボンを両手で上に引っぱり上げながら水をこいで、水たまりの外に出た。

「拓ちゃんはだめだ。今度私がやる。交代」

そう言うのと、拓也の前の玉石の上を裸足でポンポンと飛んで、和子は水の入口のところに行った。

「裸足じゃ爪はがすぞ」

「だいじょうぶ、だいじょうぶ」

「なんでズックはかねんだ」

「んだって、まだ新しいもん」

和子は玉石の上で、だんだん澄んでくる水底に目をはしらせた。

拓也は新しいもと言われて、忘れていた自分のズックを思い出した。頭だけちよつと下げて見てみると、乾いた玉石はぬつてもらった右足のズックの方だけ、中にたまった水が流れ出て、黒くぬれていた。それを見るとなんとなく、もう水に入る気がしなくなった。

和子が向こうから水の中に入ったので、拓也は出口の方にのろのろと歩いた。さっきやなを作ったときは気がつかなかったが、水たまりの水が川に合流するわきの、大きな玉石の上に、きのう遠足にはいてきたピンクのズックがきちんとそろえて置いてあった。

和子のズックを見ているうちに、拓也は半分酔ったような気持ちで、やなを通りこし、何となく玉石に近づいた。そして、これも、さわつてみようなどと少しも思っていないのに、右側のズックを手にしてながめた。

ながめている自分に気がつくと、今度は、はつきりと、このズックをぬらしてやりたいという気持ちがおこった。拓也はゆっくりとしゃがんで、かかとの上をそつとつまみながら水面に浮かべてみた。拓也はなかなかしみてこないズックの中をじっと見つめていた。

「なにすんのよ」

という言葉といっしょに、背中に水が飛んできた。

背中がヒヤツとして立ち上がったはずみに、手はズックをはなしてしまった。二人は同時にアツと叫んだ。手からはなれたズックは、川に流されて二回、三回まわったかと思うと、本流の流れにのって川下の方に、どんどん流され始めたからだ。

拓也は走った。走りながら、まわりに棒きれがないかと、ズックと交互に川原を見わたした。しかし、役にたちそうなものは何も落ちていなかった。拓也は岸に押し戻されることを願いながら、玉石の間をすりぬけたり、砂に足をとられたりしながら、ズックを追いかけた。

川は、ところどころ早瀬になって白いしぶきを上げ、ズックをもて遊ぶように速く遅く流した。岸から、だんだんとはなれていく。

拓也はねこやなぎやすきのやぶになっている川原の端まで走っていた。そこから土手に上がり、なおも走った。

土手はどんどん高くせり上がって、りんご畑の端になると、そこからは雑木の山で、川はがけの下に見えなくなった。ズックは沈んでしまったのか、がけの下を流れて行ってしまったのか、見つからなかった。拓也は肩で息をしながら、がけの下で砕けている白いあわを、しばらくにらみつけた。

「ちくしょう」

ひよろひよろした女郎花の花をペシッとおって、そこにたたきつけてから、しかたなく引き返した。

川原の土手にもどると、すぐ下の玉石に和子はすわっていて、片方のズックに人差し指を入れ、くるくるまわしていた。拓也はそれを見ると、どうにでもなれという、やけっぱちな気持ちになった。

「ズックどうしたア」

和子が立ち上がった。

「流れて行った」

「アア。きのうと今日しかはいていないのに無くしちゃった。きつとしかられるなア」

「かんべん。んでも、流そうとして流したんじゃないぞ」

「いたずらしていたからよ」

そう言われると、拓也は何も言うことができなかった。ただ、和子の顔をずっとにらんでいた。視線をさけてしまえば、とんでもない悪者

にされてしまいそうで、そうしていることが、拓也にすれば、自分を守る最後の術だつた。

「私、帰る」

和子は片足だけズックをはいて、裸足の方を近くの玉石にのせながら、ピョコタン、ピョコタンと歩き出した。小さな玉石のある川べりを歩いていくから、土手の上から見ていると、川の中に和子が見える。川面をなでて川風が吹くと、風の通った道が小さく波だつて、キラキラと夕陽をあびて光った。その中を小さなハヤがときどきはねて、パチャンと落ちる音がさびしく聞こえた。

拓也は、どろどろによごれてしまった自分のズックを見て、流そうとして流したんじゃないぞ、と口の中でつぶやいた。そして、土手をかけ降りて、和子に追いついた。

「流そうとして流したんじゃないぞ。絶対に流そうとして流したんじゃないぞ」

拓也は同じことをくりかえした。

「わかってるわよ」

「おぶってやる」

拓也はくりと背を向けた。

「いいわよ、はずかしい」

「はずかしくとも、おぶってやる」

「いやだよ」

「いいから早く」

和子は拓也の勢いにまけて、首に手をまわした。拓也はよろけながら土手をのぼった。

「また買ってもらわなくちゃ」

和子が背中と言った。

りんご畑を過ぎたところから、拓也の手はしだいにしびれてきた。何度もしよい上げながら、ピンクのズックを川に浮かべたときのことを思い出していた。

おこられることはしかたがないけれど、少しでもねたましい気持ちちが自分にあつたことを、知られるのではないかと思うと、拓也は自分が悲しかった。そして、ねたんだ気持ちちがズックを流したんだと言われることが恐ろしかった。

「ほんとうに、流そうとして流したんじゃないぞ」

あえぎながら拓也はつぶやいた。汗だくだった。足はガクガクしていまにもつぶれそうだった。

「もう降ろしてよ。歩いて行くから」

拓也は聞こえてないように、のろのろと進んだ。

「降ろして」

背中では和子がさわいだので、拓也はよろめいた。その拍子に、ぬってあつた方のズックに力がかかって、プツンとぬい目がほどけて、白い糸が出てきた。

つぶれるもんか、と、しびれた腕に力を入れた。それでもズリズリ和子はさがってくる。気持ちとはうらはらに、とうとう拓也はつぶれた。

前を和子が歩いていく。じやり道に裸足の右足をそつと置くようにして、一歩ずつ進む。④口ぎたなくののしられたり、悪口を言われたほうが、どれくらい気がかかるかなるかしれやしない。それなのに、和子はなにも言わなかった。

うつむいて歩く拓也の目に映るのは、ズックのない右足だけだった。素足がとがった小石を踏むと、ズックをはいた方の足が、あわてて先に出る。そしてしっかりと和子をささえた。そのたびに、拓也はズキンと胸が痛くなる。ひたいから流れてくる汗が冷たかった。ピンク色のズックが片方だけになると、前にもまして、残った片方がきれいに見えた。

「和ちゃん」

「……」

「和ちゃん」

拓也は和子の前に走り出て、糸のほどけたズックをぬいだ。

「ボロだと、はけば痛くない」

面と向かった拓也は、和子の顔をじつと見た。和子のひたいにも汗がにじんでいる。先の少し上がりぎみの目もとに、小さなほくろがある。口もとがすねたように、まんなかでつぼまった。^⑤今まで何度も見てきた顔なのに、ひとつひとつが、拓也の知っていた和子とはちがつているように思えた。

スキの穂がさつとなびくと、吹いてきた風が和子の表情を運んできたように、顔がやわらかくふくらんだ。

「うん」

ピンクのズックと拓也のズックは、和子を交互に運んで行く。

流そうとして流したのではないけれど、流してしまったのは自分なんだ。どんな理由をつけたところで、片方のズックはもうないのだ。どんなに、ため息をついたところで、その事実からは逃げられはしない。

拓也は、わざと裸の足に力を入れて歩いてみる。

痛みは、体を通りぬけていった。

(最上一平「糸」による)

問一 — 部①は「いいかげんな返事、はつきりしない返事」を意味する言葉です。「」に入る漢字一字を答えなさい。

問二 — 部②「きのうまで履いていた物なのに、もう何年もどこかでほこりにまみれていた、きたない物に見えた」とありますが、そのように見えたのはなぜですか。五十字以上、七十字以内で説明しなさい。

問三 — 部③B「言わなければよかった」とありますが、——部③A『ちょっとカッコ悪いな』と言って、笑ってみせた」からここまでの拓也の心情の変化を、「後悔した。」につながるように、五十字以上、七十字以内で説明しなさい。

問四 — 部④「口ぎたなくののしられたり、悪口を言われたほうが、どれくらい気がかるくなるかしれやしない」とありますが、拓也の気の重さがわかる、ひと続きの二文を、これより前からさがし、はじめの五字を抜き出しなさい。

問五 — 部⑤「今まで何度も見てきた顔なのに、ひとつひとつが、拓也の知っていた和子とはちがつているように思えた」とありますが、拓也がそう感じたのはなぜだと考えられますか。五十五字以上、七十五字以内で説明しなさい。

★ 問二～問五は、句読点や記号も一字として数えます。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

みかん栽培を生業としていた永田照喜治氏は、若い頃から植物をよく観察する人だったという。あるとき永田氏は、過酷な土地に植えられたみかんのほうが、肥沃な土地に植えられたみかんより甘くておいしいことに気づく。そこで彼は肥沃な土地を手放し、石だらけの海沿いの土地を購入して、単独で甘いみかんの開発に挑んだ。最低限の肥料と水で、植物が本来持っている力を最大限まで引き出そうと、シコウ錯誤をくり返したのだ。まわりの人はさんざん永田氏を非難したが、彼はまったく動じなかった。やがてその研究は国内最高峰の学者たちに認められ、水に沈み、フルーツのような甘さを誇るトマトや、生で食べられるタマネギなどを生む「永田農法」へとつながっていく。まさに「非属の農夫」とも言える永田氏は、いまなんとロボットによる農業に取り組んでいるという。野外での過酷な肉体労働があたりまえの農業を、快適で安全に楽しくできるものに変えようとしているのだ。

「農地はただ必死に耕せばいいのではない」と永田氏は言う。体に悪いうさぎ跳びを野球少年にさんざんやらせてきたように、この国ではよく、考えずに意味のない努力をさせがちだ。そして、その根拠はたいがい「みんながしているから」である。

野球はどちらかといえば瞬発系の「速筋」スポーツなのに、いまだにただひたすら走らせるなど、やみくもに「遅筋」を鍛えさせているコーチが多いと聞く。

永田氏はかつて特攻隊にいた。「みんながしているから」と、お国のために死んでいく仲間を見てきたのだろう。もし彼がずっと常識や伝統といったものに従っていたら、僕たちはいつまでも水っぽくてすっぱいトマトしか食べられなかったのかもしれない。

人生で自分を使えるエネルギーには限界がある。そうなると、どの部分にエネルギーを注ぐべきかを考えなくてはならない。

本質的なことを考えずに、群れのなかをうまく泳ぎ切ることにだけにエネルギーを注いでしまうと、もはや自分の人生を好転させることはむずかしくなってしまう。たとえチェーン店で身を²ゴにして働いたとしても、店長以上の待遇はなかなか望めないだろう。成功して莫大な収入を得ることも、海外で新しい出会いがあったり、密かに抱えていた夢がかなったりするようなこともない。携帯電話でも買うように仕事を選ぶと、知らないうちに「意味のないうさぎ跳び」や「耕さなくてもいい畑を必死に耕す」羽目になりかねないのだ。もちろん、成功しているチェーン店で商売のイロハを学びたいとか、将来的には本部の社長になりたいという人もいるだろう。しかし「タイハン」の人は、「ただなん

となく有名だから」といった漠然とした理由で^①定置網にはまり、そのなかでうさぎ跳びをしながら、出る杭に嫉妬している。ただ、そんな人ほど「真面目に一生懸命生きている」ように見えるから人生は恐ろしい。自分で考えたり、行動することを怠けているにもかかわらず、だ。そんな人が「俺だって朝から晩まで頑張っているんだ」なんて食ってかかってきても、肝心のところで怠け者なのだから、相手にしなくていいだろう。ここまできて、「うさぎ跳び選手の努力」を称える気にはなれない。

知り合いの漁師がみんな、「魚が捕れない」と言う。環境問題が背景なのはわかってはいるものの、実際に海に出て釣りをしてみると、その深刻さはここ数年、身に沁みる。

ところで、そんなときに^②どうしても向かってしまいがちなのが、「かつて大量に魚が捕れた漁場」だろう。ところが、「いま」はすでに「かつて」ではなく、その後、幾度にもわたって大量の人間が押しかけ、おまけにゴミや廃液まで流し込んで小魚すら住めなくなっている可能性が高い漁場だったりするのだ。

パチンコに行って少しの時間で大儲けした人は、その後、その何十、何百倍もの時間と財産をつぎ込んでしまう。それを人生のささやかな冒険と言うならば仕方ないが、自分が銀行員になって、それなりに安定した幸せな人生を過ごせたからといって、「なにがなんでも銀行員になれ」と子供に指図するのは筋違いだ。時代が移り変わっていることに無自覚だと、親子ともども不幸になる可能性がある。これも思考停止という習慣が生んだ結果だ。かつての漁場にはもはや魚はいないと考えるべきだろう。

(山田玲司『非属の才能』による)

問一 〓部1ゝ3のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 〓部①「定置網にはまり、そのなかでうさぎ跳びをしながら、出る杭に嫉妬している」とありますが、どういうことですか。「に嫉妬している」ということ。」につながるように、四十字以上、六十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問三 〓部②「どうしても向かってしまいがちなのが、『かつて大量に魚が捕れた漁場』だろう」とありますが、どうして「かつて大量に魚が捕れた漁場」に向かってしまうのか、三十字以上、五十字以内で説明しなさい。

★問二、問三は、句読点や記号も一字として数えます。

このページより後ろは白紙です。

A
国
語

21

解答用紙

受験番号

氏 名

--	--

問

問
二

[illegible]

25

問三

後悔した。

後悔した。

問
四

問五

[illegible]

問一

1

1801

2

3

1011

問一

[illegible]

25

に嫉妬しているということ。

問三

[illegible]